

# 往生地浄水場

中部地方の  
選奨土木遺産

所在地：長野市 竣工年：大正4年 管理者：長野市

認定理由：長野市の水道創設事業で建設された市内最古の浄水場であり、後の水道普及に大きく貢献し、建設後100年経った今も稼働する施設である。

平成29年度登録



濾過池と上家の見える各施設。

長野市は、そもそも水質が悪く、井戸水の量も豊富でない立地条件であるため、市街地では伝染病や防火用水不足に悩まされてきた。明治初期には、戸隠の湧水を通水する事業も実施されたが、技術不足により長く続かず、その後も水道布設が提唱されるが、事業費不足などにより断念されていた。全国における水道の普及率が高まりつつあった明治末年、長野市は水道調査部を設置して、市内の技師・技手を充実させて本格的な水道事業に着手した。

明治44年に戸隠を水源とする水道布設が市議会で可決されると、長崎市の貯水堰堤で知られる吉村長策に調査と計画を委嘱し、翌年に国から認可される。吉村を顧問として、長野市の技師山下利兵を技術長としたチームにより大正2年に工事着工、同4年に往生地浄水場から市内へ、悲願の給水が開始された。

竣工時のしくみは、以下の通り。戸隠村内に設けられた堰堤による貯水池から16kmの導水管で市内字城田（往生地浄水場の場所）へ水が自然流下により送られると、受水井で計量された後、濾過池へ入る。RC造3つの濾過池が連絡して設けられた（1つは予備）。濾過された浄水は、量水版のついた制水井で配水池へ送られる。配水池は隣接する高区と小丸山の低区の2種が計画され、高区は濾過池と同時に設けられた（現在の南配水池）。



▲ 戸隠水源からの導水管布設工事状況（長野市上下水道局『長野市水道百年史』2015）

▲ 竣工当時の状況（長野市上下水道局浄水課提供）

3つの濾過池と弁室、集合井、南配水池は、若干の補修はされているものの、ほぼ建設当時のまま残されており、一つ一つの構造物が意識して飾られていることがわかる。受水井（着水井・濾過池弁室）と制水井（集合井）および浄水井（配水池入口）には、上家が設けられている。円筒状の制水井はレンガ張り建物で、屋根・四隅・窓枠には切石を用いたネオ・ルネサンス様式でデザインされている。高区配水池（南配水池）の浄水井（入り口）はRCによる上屋が設けられており、ペディメント（三角破風）とピラスター（擬柱）の古典的モチーフをモダンに表現したものとなっている。



▲ 現在の往生地浄水場の配置図  
各部の名称が、設計時と現在で異なる。  
（左の説明文参照）